

# 後北条氏の城とは何か

—企画展及び関連普及事業の取り組みから—

君 島 勝 秀

## I. はじめに

埼玉県立嵐山史跡の博物館（以下、当館）では、これまで国指定史跡菅谷館跡の保全及び中世遺跡資料の収集、調査活動を行うとともに、菅谷館跡をはじめとする史跡を活用した普及事業を展開してきた。その内容は、時に中世城館跡、時に中世寺院跡、板碑をはじめとする中世石造物と、中世に関する様々な史跡や資料を対象としてきた。昨年度（平成19年度）は、企画展「後北条氏の城～合戦と支配～」の開催をはじめとして、戦国期の中世城館を取り上げた普及事業を行い、多くの方に当館に足を運んでいただいた。

本稿では、平成19年度企画展「後北条氏の城～合戦と支配～」の取り組みについて総括し、展示のテーマであった「後北条氏の城とは何か」について、利用者に対してどのように情報発信ができたのか、反省も含めて気がついたことを記しておきたい。

## II. 平成19年度の普及事業の取り組み

平成19年11月、国の文化審議会は、県指定史跡であった松山城跡（吉見町）、杉山城跡（嵐山町）、小倉城跡（ときがわ町）の3城跡を、菅谷館跡とともに、「比企城館跡群」として国指定史跡にするよう文部科学大臣に答申し、翌平成20年3月に告示された。このことは、比企地域において文化財の整備保存と活用普及を行ってきた当館にとって記念すべきことであり、地元市町をはじめ文化財関係各機関の地道な活動の成果であった。この動きに連動する形で、当館が平成19年度に行った普及事業の数々の取り組みは、まさに「戦国城館」一色に染まったものとなった。

当館が行った平成19年度の普及事業について、中世城館跡に関係した事業に限って、以下に掲げる。なお、ここに掲げた事業は、子ども向け事業を除く当館の普及事業全体の約9割を占めており、昨年度行った普及事業の大きな柱となるものである。

（展示事業）

・企画展「後北条氏の城—合戦と支配—」会期：平成19年12月1日（土）から平成20年2月24日（日）まで。展示品総数162点。会期中の入館者数12,252人

（芸術拠点形成事業）

文化庁所管の芸術拠点形成事業の支援を受けて、比企地区の市町村教育委員会とともに「博物館周辺文化財の複合的活用事業実行委員会」を設立、日本ウォーキング協会をはじめ多くの民間団体の協力を得て推進した事業。

・ガイドブックの刊行 B6板108頁多色刷り「歩いて廻る比企の中世再発見」部数10,000部、今後の文化財活用事業の有効な道具となることを目的に作成。内容は、比企地区に寄居町、越生町、川越市、坂戸市などの周辺地域を加え、中世の史跡を歩いて散策できる12コースを設定し、各コースの史跡や文化財を紹介。コースに該当する各市町村の文化財担当者の協力を得て作成した。芸術拠点形成事業の中核となった仕事である。

・シンポジウム 平成20年1月26日（土）・27日（日）、国立女性教育会館講堂において開催。「後北条氏の城」をテーマに、1日目は「戦国大名北条氏と領国支配」池上裕子氏（成蹊大学教授）の講演、2日目に個別報告とパネラー6人による討論を行った。のべ参加者数1104人。

- ・城跡ハイキング 平成19年12月16日（金）、ガイドブックの活用事業として、当館から小倉城跡、青山城跡、小川町駅を繋ぐ約5 kmを歩きながら山城跡を見学。参加者数242人。
- ・お城ツアー 平成20年2月10日（日）、ガイドブックを活用し、国指定史跡となった比企城館跡群の4城館跡（菅谷館跡、松山城跡、杉山城跡、小倉城跡）を見学するバスツアーを開催。参加者数76人。4城館跡の新指定記念事業として計画された。

（教育普及事業）

当館が例年行っている事業で、調査研究事業の成果や周辺史跡を活用、普及する事業。

- ・歴史講座 10回開催。「小田原北条氏と戦国城郭」を年間テーマとして、小田原城跡をはじめ後北条氏が支配した城跡を1回1城跡のペースで、各城跡の調査担当者を講師に招き開催。のべ参加者数1012人。
- ・野外歴史教室 2回開催。周辺の史跡を散策する事業。平成19年6月に「腰越城跡を訪ねる。」、平成20年3月に「横瀬根古屋城跡を訪ねる。」を開催。のべ参加者数91人。

（戦国時代を共通テーマにした他館との共催事業）

昨年度は当館のみならず、埼玉県内及び近県の博物館においても戦国時代や城郭をテーマにした普及事業が多く開催された。その中で、他館に積極的に共催を呼びかけて取り組んだ結果、広報的に相乗効果を生み、入館者増に結びつけることができた。当館が昨年度取り組んだ主な共催事業について、以下に掲げる。

- ・5館連続展示「関東の戦国を知る」 戦国時代を共通のテーマに展示開催した5館が共通ロゴを各館のポスター、チラシに掲載し、スタンプラリーを行った（5館全てを観覧した方先着100名に記念品贈呈）。共催館と各館の展示名、会期は以下の通り。

川越市立博物館 「後北条氏と河越城」 平成19年9月15日～10月22日

行田市郷土博物館 「忍城主成田氏」 平成19年10月13日～11月25日

鉢形城歴史館 「後北条氏と印」 平成19年10月13日～11月25日

葛飾区郷土と天文の博物館 「戦国を駆け抜けた葛西城」 平成19年10月21日～12月9日

埼玉県立嵐山史跡の博物館 「後北条氏の城―合戦と支配―」 平成19年12月1日～平成20年2月24日

- ・3館連携シンポジウム「最新成果！戦国城館」 戦国時代を共通テーマに、3館が各シンポジウムの内容を受ける形でリレー方式に行った。共催館と各館のシンポジウム内容は以下の通り。

葛飾区郷土と天文の博物館 「葛西城と古河公方足利義氏」 平成19年12月1・2日

埼玉県立嵐山史跡の博物館 「後北条氏の城―合戦と支配―」 平成20年1月26・27日

東京都江戸東京博物館 「太田道灌と城館の戦国時代」 平成20年3月8日

私は上記の事業のうち、企画展を主に担当するとともに、ガイドブックの刊行を除く全ての事業に関わらせていただいた。次に、企画展「後北条氏の城～合戦と支配～」の取り組みについて総括する。

### Ⅲ. 企画展「後北条氏の城―合戦と支配―」について

（展示主旨）

後北条氏が関東に進出し、天正18年に滅びるまでの戦国時代と後北条氏に関係する城郭についてスポットをあてて、後北条氏の城の実態を、合戦と地域支配という2つの側面から明らかにしようとした。合わせて北武蔵の戦国合戦として有名な松山合戦と松山城主上田氏、比企の戦国城郭について取り上げ、松山合戦の舞台となった松山城跡をはじめ、杉山城跡、小倉城跡の新指定史跡の出土品、県指定文化財である浄蓮寺文書をはじめとする上田氏関係の歴史資料などを展示し、比企地

域に所在する優れた文化財を広く知らせる場とした。

(展示構成)

展示室の区割りに従って展示内容を6つに分けて展示した。各区割り(各章)の展示資料の詳細は、企画展図録「後北条氏の城—合戦と支配—」(2007年当館発行)に一覧を掲載してある。

「戦国大名・後北条氏」(第1展示室) 展示全体の導入部分にあたるここでは、展示対象となる時代背景の解説を念頭に置き、関東に覇権を築いた後北条氏の紹介を行った。関係年表、後北条氏の系図、後北条氏の領国を示す地図、後北条氏の各当主の紹介をパネル解説した。展示資料として早雲寺原資料の後北条家当主肖像画(複製)、小田原市所蔵の北条家着到定書、小田原城絵図、幻庵の短刀、四十八間筋兜などの古文書及び古美術資料を展示し、多種類の資料を展示することにより展示に立体感を持たせた。

「小田原城・八王子城・鉢形城」(第2展示室) 後北条氏の拠点城館となった小田原城跡、八王子城跡、鉢形城跡の発掘調査の成果を解説し、各城跡の土器、陶磁器を中心とする出土品を展示した。出土品の数量に偏りが大きく、結果八王子城跡の出土品が大きく場を占めた。

「城と戦支度」(第3展示室) 城跡から出土した武器、武具に関する考古資料を展示し、戦乱の舞台となった城の姿を改めて浮き彫りにした。展示資料は葛西城跡、騎西城跡、八王子城跡の出土品で、武具、槍、矢じり、鉄砲玉、大筒玉など。騎西城跡出土の薙鎌(ないがま)は、出土例が極めてまれで、当時の戦闘の生々しさを語る資料として展示した。

「松山合戦」(第3展示室終わり～第4展示室始まり) 戦国合戦として有名な松山合戦を取り上げ、『関八州古戦録』などの軍記物によって伝承される合戦と、その舞台となった松山城跡の調査成果を紹介することによって、合戦の舞台となった城の姿をクローズアップすることを目指した。前半には松山城跡の出土品を展示して解説、後半には正法寺の中世文書のうち栄俊筆松橋血脈裏書



写真1 展示風景「八王子城跡」

を展示して、戦乱に巻き込まれた周辺地域の惨状について解説した。

「上田氏と松山領支配」(第4展示室) 松山合戦を経て後北条氏に臣従し、松山城主となった上田氏について取り上げた。正法寺所蔵の中世文書(東松山市指定文化財)、浄蓮寺文書(県指定文化財)をはじめとする浄蓮寺所蔵の古文書、鱧口、板碑など、上田氏の菩提寺であった浄蓮寺に所蔵される資料を中心に展示解説した。パネル展示では上田氏系図、東秩父村の大河原地区に残る上田氏関連の史跡をパネル展示して、上田氏の本領であったとされる大河原谷及び西の入筋を浮かび上がらせようとした。

「比企の戦国城郭」(オープン展示スペース) 比企地域に所在する戦国城館として、比企城館跡群として新たに国指定史跡となった(企画展会期中に指定予定) 杉山城跡(嵐山町)、小倉城跡(ときがわ町)の出土品に加えて、同年度に発掘調査を行ったばかりの腰越城跡の出土品を展示し、最新の調査成果についても解説した。

(観覧者の反応～アンケート結果より～)

企画展観覧者に対するアンケートは、今回264名の方から回答を得た。この回答結果によって、即座に会期中の観覧者像を把握することはできないが、今回の観覧者の傾向や展示に対する感想及び



写真2 展示風景「城と戦支度」



写真3 展示風景「上田氏と松山領支配」



写真4 展示風景「比企の戦国城郭」

意見を読みとることができる。

：観覧者の性別

(男性) 205人・77.7% (女性) 59人・22.3%

：観覧者の年齢

(15歳未満) 23人・8.7% (15～19歳) 7人・2.6% (20代) 18人・6.8% (30代) 48人・18.3%  
(40代) 38人・14.5% (50代) 41人・15.6% (60～64歳) 32人・12.2% (65歳以上) 55人・  
20.9%

：観覧者の住所

(埼玉県内) 180人・69.8% (県外) 78人・30.2%

：来館の回数

(初めて) 125人・48.4% (2～5回) 95人・36.8% (6～10回) 23人・8.9% (11回以上) 15  
人・5.8%

：だれと来館したか

(一人で) 126人・47.7% (家族と) 92人・34.8% (友人と) 30人・11.3% (学校等の団体で)  
9人・3.4% (その他) 7人・2.6%

：来館の目的(複数回答あり)

(企画展観覧) 207人・77.2% (講座受講) 2人・0.7% (団体見学) 8人・2.9% (学校活動)  
4人・1.4% (余暇のくつろぎ) 14人・5.2% (観光のついで) 11人・4.1% (その他) 22人・  
8.2%

：企画展開催をどのような方法で知ったか(複数回答あり)

(ポスター) 76人・27.7% (チラシ) 58人・21.2% (彩の国だより) 19人・6.9% (役場の広報誌) 2人・0.7% (雑誌等) 5人・1.8% (インターネット・HP) 37人・13.5% (テレビ・ラジオ) 6人・2.2% (知人に聞いて) 19人・6.9% (学校で聞いて) 1人・0.4% (ここに来て) 24人・8.8% (その他) 27人・9.8%

：パネルなどの文字・内容について(複数回答あり)

(見やすかった) 41.6% (わかりやすかった) 42.7% (見にくかった) 13.9% (わかりにくかった) 1.8%

：印象に残った展示は何か

(戦国大名・後北条氏) 149人・28.7% (小田原城) 39人・7.5% (八王子城) 52人・10.0% (鉢形城) 46人・8.8% (城と戦支度) 35人・6.7% (松山合戦) 60人・11.5% (上田氏と松山領支配) 73人・14.0% (比企の戦国城郭) 66人・12.7%

：全体の感想

(大変満足) 21.2% (満足) 58.3% (ふつう) 16.6% (不満) 1.9% (大いに不満) 1.9%

：意見・感想

- ・照明が暗くてよく見えない。解説文に光をあてるなどの工夫がほしい。
- ・照明の光量を上げてほしい。(2人)
- ・壁付けのパネルの文字が小さい。(3人)
- ・現在の地図に対応して(城や鎌倉街道などの)場所がわかるようにしてほしい。(5人)
- ・城郭と地図がいっしょに展示してありわかりやすかった。
- ・城郭の写真は方角を示してくれるとわかりやすい。
- ・小倉城の写真と地図は同じに向きにした方がわかりやすかった。
- ・地図はもう少し近くで見られるとよい。
- ・城への行き方、登れる城なのかどうか知りたい。
- ・各城の特徴を発掘時の写真を多用して解説してほしい。
- ・後北条氏、北条氏邦、上田氏の古文書をもっと多く展示してほしい。
- ・当時の狼煙のネットワークを紹介するとよかった。
- ・逸見家文書の展示は具体的な合戦のイメージがつかめた。
- ・上田氏の研究は少ないので興味深かった。
- ・菅谷城の説明が少ない。戦国時代のこの城の使われ方を説明してほしい。
- ・中世がダイナミックな時代であるということがよくわかって非常に興味をもった。
- ・後北条氏の支配した地域全てを取り上げた企画展があればより満足です。
- ・関東を治める上で松山領は重要なポイントだったと改めて理解できた。
- ・比企地域には歴史を感じさせる様々な史跡があることに驚いた。
- ・スタンプラリーは楽しかったので今後も続けてほしい。
- ・企画展では料金を上げて解説員を配置してはどうか。
- ・前回の企画展の図録を再版してほしい。
- ・閲覧用に置いてある刊行物を再版してほしい。

アンケート結果からわかる来館者の傾向について、以下に掲げる。まず、来館者の住所では、3割以上の方が東京、神奈川、群馬などの近県から来館している。他館との共催の取り組みが効果を生んだと考えたい。また、来館の回数では、初めての方が半数近くに達している。年齢的には65歳以上が20.9%と最も多い一方で、30～64歳でも一定の割合を占める。城郭に興味のある方が多い傾向が背景にあると考えられる。

次に、印象に残った展示では、第1展示室の（戦国大名・後北条氏）が3割近くを占め、第4展示室の（上田氏と松山領支配）、オープン展示コーナーの（比企の戦国城郭）がそれに続く。（戦国大名・後北条氏）は、展示の導入部分としての後北条氏の紹介に加えて、展示資料が当主の肖像画、兜などやや目を引く展示物が多かったことによるものであろうか。

意見・感想の中で目立ったのは、照明の暗さを指摘する意見である。古文書や肖像画などの資料を保護するため照明を抑制し、その旨を観覧者に御案内したが、かえって説明パネルが見えにくいとの指摘をいただいた。パネルのみの照明を設けるなど、展示環境の改善は今後の課題である。照明と並んで多かったのが、パネルの文字が小さくて読みにくいとの指摘だった。この多くが12月のアンケートに寄せられたもので、1月にパネルを大きく作り直して改善した。次に地図に関する意見が多かった。観覧者が展示を見た後に現地に行くことを念頭に置いた意見が多い。また、地図の向きや写真との見比べなど、観覧者が城を詳細に把握しようとする気持ちを読みとることができる。

#### （反省点）

以下、今回の展示で気がついた点について、反省を含めて述べる。

「戦国大名・後北条氏」（第1展示室）では、企画展の導入部分として、考古資料以外の展示物によって、後北条氏を紹介するコーナーであった。戦国大名については、武田信玄、上杉謙信に比べると、その知名度が下がると思われたため、一般の方に親しみやすく知っていただくことを心がけた。アンケートの結果でも、最も印象に残った展示に上げられており、ねらいどおりの効果が得られたと思う。また、後北条氏の当主の肖像画は、展示期間を通じて五人の当主を入れ替え展示するなどの工夫をした。

「小田原城・八王子城・鉢形城」（第2展示室）では、後北条氏の本城となった小田原城をはじめ、後北条氏が関東を支配する上で、地域支配の拠点となった八王子城と鉢形城を解説することによって、後北条氏の城の姿を浮き彫りにすることを目指したが、出土品についての踏み込んだ解説の工夫が足りなかったため、展示に深みを持たせる点で課題を残した。出土品からわかること（城内の生活、茶の湯など）を解説したほうがよかった。

「城と戦支度」（第3展示室）では、考古資料から見た戦という視点で出土武器の展示を行い、戦の生々しさを想像してもらうことができた。騎西城跡から出土した薙鎌の展示では「こんな武器が使われていたとは驚いた。」「当時の戦の過酷さを想像した。」などの感想が寄せられた。

「松山合戦」（第3展示室終わり～第4展示室始まり）では、北武蔵の支配権を争った激しい戦乱について、戦乱に巻き込まれた周辺地域の惨状について想像してもらうことができた。正法寺の中世文書のうち栄俊筆松橋血脈裏書は、後北条氏対太田資正による松山城攻防戦の際に、岩殿山の伽藍が焼失し、「武州廿四郡之内十五カウリ悉ク、人家七年タエル也」とあり、周辺地域の惨状が記録された貴重な資料である。この展示コーナーは前段の「城と戦支度」とともに、展示タイトルの副題「合戦と支配」のうちの「合戦」の側面を取り上げるコーナーとなった。

「上田氏と松山領支配」（第4展示室）では、戦国武将上田氏について取り上げた。上田氏に関する研究は、近年では梅沢太久夫（平成19年度当館専門員）による『浄蓮寺慶長八年過去帳』の分析を通じた研究によって、上田氏の系譜をはじめとする実態が明らかにされた。今回の企画展では梅沢の研究の最新成果を展示に生かした。このため、この部分の展示を見ることを目的に来館された方も多かった。観覧者からは「松山城と上田氏との関係がよくわかった。」「関東を治める上で松山領は重要なポイントだったと改めて理解できた。」「上田氏に関する研究は少ないので興味深く見ることができた。」などの感想が寄せられた。

「比企の戦国城郭」（オープン展示スペース）では、国指定史跡「比企城館跡群」（企画展開催時

は予定)の小倉城跡、杉山城跡の紹介と腰越城跡の新資料を展示した。杉山城跡については、従来の縄張り研究と最新の発掘調査結果の間で築城・使用時期の食い違いが出た、いわゆる「杉山城問題」についても展示の中で触れ、シンポジウムにリンクした要素を入れた。アンケート結果では、二番目に多く方が印象に残った展示となった。

今回の展示において、全体的に苦心した点として、考古資料・発掘出土品と古文書、古美術品などの資料との展示棲み分けをしながらの展示構成の構築が上げられる。「松山合戦」のコーナーでは、展示室を、考古資料を展示する第3展示室と考古資料以外を展示する第4展示室の2つにわけて行った。

また、古文書の展示ではこまめに展示替えを行い、資料の保護に配慮しながら、展示品を増やし、観覧者には展示替えのお知らせをして再度の観覧を誘導した。また、古文書の展示解説では、読み下し文と解説が対応するようにして、具体的に何が書いてあるのか、わかりやすくした。

#### IV. 後北条氏の城とは何か

最後に、企画展のテーマである「後北条氏の城」について、利用者に対してどのような情報発信ができたかという視点から若干の感想を述べたいと思う。

ここ数年の取り組みを通じて、博物館からは、城というと近世のりっぱな石垣と天守閣を思い浮かべる多くの一般の方々に対し、戦国の城は土で築いたものがほとんどであるという実態に合ったイメージを提示してきたし、一定の浸透を見ていると思う。これは、近年の研究成果を踏まえながら、普及を行ってきた中で得られた変化である。しかし、我々普及を行う側にも、実態が未解明の部分から来る戦国城郭についての先入観が少なからずあるように思う。

戦国時代に築城された城郭のほとんどが、関東においては後北条氏の滅亡まで存続したのではないかという認識があった。また、複雑に縄張りされた城郭であればあるほど、何らかの拠点城館だったという先入観はないだろうか。

企画展では、後北条氏の時代と城郭についてスポットをあてて、後北条氏の城とは何か、後北条氏の城の実態を明らかにしようとした。その結果、後北条氏の拠点城館とされる小田原城、八王子城、鉢形城の3城を取り上げて、小田原城の惣構えと城下町、八王子城御主殿の石垣など、城郭としての特徴を強調した。北武蔵の支配をめぐる争乱の中心となった松山城、その後の城主上田氏の存在と松山領支配についての展示を通じて、地域支配の拠点として存在した城の姿を浮き彫りにした。企画展タイトルの副題に「合戦と支配」とあるように、戦国城館にある2つの側面、合戦の舞台だった側面と、地域支配の拠点としての側面を取り上げた。

シンポジウムの中でも、岩槻城、鉢形城などの戦国城下町の存在、境目で行われた合戦の舞台としての城から支配拠点としての城への集約が行われたことが指摘されている。合戦の城から支配の城へ。15世紀代に各地に築かれた城館が、16世紀代にかけて戦乱の終息とともに淘汰され、拠点城館のみが小田原合戦まで残っていくという過程が明らかにされたのではないか。